

特116

207

管溪史蹟



始



特116
207



菅原史蹟

今レ六百有餘年 順徳上皇北條氏討伐
菅原氏等起テ我朝ニ據リ遠カニ名残シ

不肖子白ク 編ラズ私チニ菅原史ヲ誌シ之ヲ世ニ銷フ當時以テ
我ガ郷土ノ史蹟ヲ叙述シテ古来ノ沿革ヲ明カニシ後人ヲ以テ
天啓 聖蹟ヲ嘆リ俾テ以テ其趨向ヲ誤ラザラシムルヲ得ニ
菅原谷寺ノ山誌カ東條西走大ニ其學ヲ助ケル
菅原氏ノ人ヲシテ感慕興起セシムルモノアリ今ヤ 東宮開駐ノ
菅原ノ聲ヲサセラルルニ際シ 謹テ菅原史蹟一書ヲ草シ以テ世
後ニ傳テ致サント欲ス幸ニ昭代ノ熱誠ニ由リ此小篇ヲ得ルニ
...

大正
13. 2. 4
内交

菅谷史記

五大

交内

平嘗テ自ラ揣ラズ私ガニ菅谷史ヲ編シ之ヲ世ニ詢フ當時以爲ラク
我ガ郷土ノ史實ヲ叙述シテ古来ノ沿革ヲ明カニシ後人ヲシテ報本
反始ノ要諦ヲ曉リ依テ以テ其趨向ヲ誤ラザラシムルヲ得ントル事
既ニ十星霜益々其目的ヲ達センコトヲ期シ常ニ資料ノ蒐集ニ從ヘ稍
獲得スル所アリ就テ今ヲ距ル六百年 順徳上皇北條氏討伐ノ議ア
ルヲ謀主參議信成ノ家人家賢等起テ我郷ニ據リ遠カニ應援シタル
事蹟ノ如キ又后一百年新田義貞ガ 後醍醐天皇ノ詔ヲ奉シ義旗ヲ
舉グルルニ當リ我郷菅谷寺ノ山徒ガ東奔西走大ニ其舉ヲ助ケタル事
蹟ノ如キハ人ヲシテ感奮興起セシムルモノアリ今ヤ 東宮關睦ノ
處ニテ譽ケサセラル、ニ際シ謹テ菅谷史蹟一篇ヲ草シ以テ區々ノ
微忱ヲ致サント欲ス幸ニ昭代ノ餘威ニ由リ此小篇ヲ讀ムモノヲシ
テ心志ヲ作興シ國民ノ道德ノ義務ヲ盡スニ於テ裨補スル所アラシ

大正甲子壬戌維時大正甲子壬戌念六

普濟寺蹟

草芥臣 管 興 吉

謹識

菅澤人蹟

菅 白 茅

護念上人傳

釋慈應、號護念上人、源為我之季子也。幼穎悟、年甫十二、入叡岳為僧、通顯密兩宗、文治元年、於越後菅谷山、造一寺安置不動明王尊像、住之、練行日新、守護佐々木盛綱告之、賴朝賴朝迎之、建久六年冬十月、慈應赴鎌倉、賴朝禮遇盡敬、會賴朝文輝年臥疾、慈應加持之、忽癒、賴朝喜之、不日而告歸、賴朝請授之一、注、慈應辭不受、賴朝挽留之、慈應不聽、拂袖上途、十一月歸山、終、世伴猿鶴、不再出世矣、正治二年圓寂、年五十八

資料

東鑑卷十五

建久六年乙卯十月十一日壬戌護念上人慈應自越後國參上佐々木三郎兵衛尉盛綱所執中也、將軍蒙有御對面是故、六條廷尉禪門末子幕下叔父

也仍禮節殊甚深云々通俗之後兼學顯密兩宗刻修驗其德近年越後國加
地在菅谷山暮天台山無動寺地形建立一伽藍安置不勸明王尊像其傍構
草庵居住練行自新云々十五日丁卯大姬公日來御病惱寢食乖例身心非
常仁耶氣之所致致護念上人依仰被奉加持之仍今日令復本給繯之嚴重
法之効驗將軍殊隨喜給勸賞求其次為興隆佛法可致寄附一庄於不動堂
之旨雖被仰出祢有存念敢不被諾申云々聖者深思凡惡難測者數二十八
日庚辰護念上人歸越後國雖令留之給聚落之交不慮幾之由答申楚忽進
發云々

同書卷十九

承元四年己巳二月五日甲子越後國菅谷寺者護念上人兼修遺跡也在幕
下御時雖有興行御志空御事出末之後涉年序訖背先考御本懷歎之由今
更及御沙汰彼寺邊尋出便直關所奉寄之由今日被仰相州云々
本朝通鑑卷四十二

後鳥羽天皇乙卯建久六年冬十月壬子朔壬戌賴朝叔父僧慈應來鎌倉慈
應者為義之孫子也曾為僧在叡岳通顯密而宗今歲於越後菅谷山造一寺
住之寺號佑々木盛錮告之賴朝賴朝迎之盡敬不日而告歸賴朝請授之一
莊慈應辭不受慈應再勸念上人

本朝通鑑卷五十三

越後無動寺沙門慈應傳

釋慈應字護念六條判官源為義之季子建父預命遁往越後別墅出家顯密
二教皆能習於越後菅谷山寂無動寺安不動尊精修勇猛靈感甚多州民
歸崇建久七年冬相州鎌倉大將軍賴朝源公以叔父之遊之柳營禮遇孔敬會
源公之不久寢病牀諸醫束手請應加持病瘳如拭源公大悅欲建寺於內俾
興教法應稱嫌不肯源公強而留之應曰聞醫藥落非僧所著柝衣北歸遂終
天壽焉

齊曰應公之志操高於湖松清似秋月不慮外垢之蒙又猶如雖生金鍊而作

吾不變其性者

大系圖

源房義

	義平	義朝	義隆	義仲	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家		
義隆	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	
義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家
義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家
義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家
義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家
義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家
義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家
義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家
義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家	義朝	義家

僧圓思 東光坊阿闍梨

博學介瓜

源義家

	義次	義久	僧慈應 辨鼓念文	乙若	龜若	鶴若	天王	僧圓思 東光坊阿闍梨	博學介瓜	源義家	義朝	義賢	義憲	顯義
	義圓	義經												

源義家

義成	經家	義俊	維義	正親	頼定	行家	爲家	爲仲	爲宗	爲成	爲朝	爲仲
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

山傳	仙見	寺傳	頼定	乙若	乙若	乙若	乙若	乙若	乙若	乙若	乙若	乙若
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

保元物語
 桑田變レテ海トナル習ヒ七月十一日寅刻ニ軍始リ辰時ニ白河殿灰燼
 トナリテ新院モ左大臣殿モ行方知ラス落サセ給ヒケレハ未刻ニ義朝

清盛内裏へ歸参リテ此由ヲ奏ス六條判官並ニ小供尋子進ラス可キ由
播磨守ニ仰付ラル十六日清盛三百騎ニテ如意山ヲ越テ三井寺ヲ求ム
レ見ヘス東坂本ニアルヨシ聞エテ大和庄泉邊レ云テ所ヲ進却ス之
レハ無動寺領ナレハ大衆起テ清盛カ即等西三人搦捕テ大津東浦ヲ燒
拂フ之レハ山門ノ領ナル上昨日爲義ヲ船ニテ東近江ハ落シタリト云
フ此事虚説ニテ大衆ノ計ナリ子息道ハ小原静原并生ノ里鞍馬ノ奥貴
船ノ方思ヒ思ヒニ落行ケハ深山隱レノ秋ノ雲露モ時雨モ戸テ袖ノ海
トソナリニケル爲義入道ハ鴨河ヲ渡リ紅ノ森ヨリ雜色花澤ヲ義朝ノ
許ヘ遣シテ之レマテ進レ来レルヨシ申サレケレハ左馬頭夜ニ入りテ
奥ヲ走リ竊ニ判官ヲ迎取リ給ヒケリ(中略)去程ニ爲義法師ノ頸劍ヘキ
ヨシ義朝ニ宣下アリケレハ終ニ斬ラレ給ヒケリ

同書

藏人右少弁助長朝臣ヲモツテ仰下サレケルハ汝カ弟共ノイマタマク

アルヲタトヒ幼ナクトモ女子ノ外ハミナ尋テ亡フヘシト也宿野ニ歸
リ茶野次郎ヲ呼ンテ宣ヒケルハ餘ニ不便ナレトモ勅諭ナレハ力ナシ
母カ乳母カ膝ヲ山林ニ逃隱レタランハイカバセン大佛堀河ノ宿野ニ
アル當腹ノ四人ヲハスカシ出テ相構テ道ノ程他シメスシテ船團ニテ
ウシナヒ申ヘシトソ命シケル

以上

予親念上人傳ヲ草スルヤ以上ノ資料ニ據レリ而シテ上人ノ生年及入
滅ノ年度ニ至テハ史乘載スル所無シト雖民間存スル所ノ不動明王之
縁起及不動記ニ

建久二年上人年四十九トアルニ據レハ上人ハ康治二癸亥年又源爲
義四十八歳ノ子也大系圖ニ據レハ上人ノ次ニ乙若建若等ノ數子アリ
保元物語ニ乙若年十三トアリテ保元元年年十三ハ天養元年ノ生ニシ
テ天養元年ハ上人ノ生レタル康治二年ノ翌年ナリ尊卑令脈ニ乙若年

十四トアリ若シ乙若保元元年二十四トハ康治二年生ニシテ上人ト
同年生ナリ父爲義ハ婢妾ノ子女ノ多カリシハ本朝通鑑ニ後白河天
皇重勅義朝授宗其弟頼賢等誅之義朝遣兵捕頼賢頼仲爲宗爲仲及乙若
魚若鶴若天王童等衆九人悉斬之於船岡山下爲朝聞兵至逃去(甲鬼)乙
若等母悲其子皆誅自沈於水時人情之註内記平太正遠以四行遠弟四甲三貞處
其婦乃乙若母也婦曰大炊信美深青藏野與義朝睦爲義朝弟其婦所生男乙若合
四十三人此時被誅者九人其三男義朝弟在常陸國十郎軍兵衛遠能其餘跡跡居
赤松寺女子別爲官廿或嫁能野別當或養於住吉社司トアルニ據テ明ナレ
ハ同年生ノ兄弟モ亦多カリシナルヘク上人ノ生年康治二年ナルコト
兄弟ノ年齢ニ對照シ信ヲ措クニ足レリ而シテ入滅ノ年度ニ就テハ多
少疑問ナキニアラスト雖管谷寺過去帳ニ建仁三庚申年入滅ノ旨ヲ記
セリ建仁三年ハ癸亥ニシテ庚申ニアラズ上人癸亥ニ生レテ庚申ニ入
滅ス年五十八ナルヲ知ルヘト當時年踰天子即位ヲ以テ改メ兵革ヲ以

テ改メ疫病ヲ以テ改メ災禍ヲ以テ改メ祥瑞ヲ以テ改メ斯ノ如ク此ニ
數ナルヲ以テ年踰ヲ知ラサルモノト雖能ク干支ヲ知レリ故ニ干支
ニ據リテ上人ノ入滅ヲ土御門帝正治二庚申年トナセリ東鑑承元四年
二月五日條ニ越後國管谷寺若護念上人重修遺蹟也トアリテ正治二年
ヲ去ル十年後ナル承元四年ハ上人既ニ入滅セラレタルコト明ナルニ
徹スレハ上人ノ入滅ヲ正治二年トナスモノ當リ得タリト云フヘシ而
シテ上人ノ入滅年度モ亦史乘載スル所無ケレハ之レヲ口碑傳ニ據
テ補ハサルヘカラス口碑傳ナル所ニ云フ
護念上人隱慈應ハ康治二年京師ニ生ル父ハ六條判官爲義ト云ヘリ
上人幼ニシテ穎悟ナリシカハ爲義特ニ之ヲ愛シ久壽元年年十二文
學修業ノ旨メ比叡山ニ入ラシム上人篤ク佛法ニ志シ深ク顯密ノ兩
宗ヲ究メ遂ニ塵俗ヲ解脫シテ僧トナル保元ノ亂父爲義敗北シ兄弟
多クハ殺戮セラレタレト上人既ニ緇徒タレハ難ク免レ得タリト之

予保元物語ニ對照スルニ同書義朝幼少會弟送船園ノ條ニ兵カ乳母カ
 膝ヲ山林ニ逃隠レタランハイカニセン六條堀河ノ宿所ニアル當腹ノ
 四人ヲスカシ出テ相尋テ道ノ程他レメスシテ無因ニテウシナヒ申ハ
 シルソ命シケルトアリテ當時佛門ニ入リタルモノハ不問ニ付セラレ
 タルヲ知ルニ是ル鞍馬ノ東光防阿闍梨圖忍寺律師賴實ノ如キモノ是
 レナリ保元年ハ上人年十四ナレハ其以前ニ入教セシモノナルハク口
 碑傳フル所信ヲ措クニ足レリ

上人示寂地及其墳墓ニ就テモ亦史東載スル所無シレ雖上人ハ建久六
 年十月十一日鎌倉ニ着シ滞在十九日同月二十九日鎌倉ヲ發シテ越後
 國ニ歸リタルコト東鑑ノ明記スル所ナリ但シ東鑑ニ二十八日庚辰護
 念上人歸越後國トアレ比同月壬子ノ朔ナレハ十五日丁卯ハ十六日丁
 卯ニシテ庚辰ハ二十九日ニ當レリ而シテ上人再ヒ他ニ巡錫セシコト
 無ケレハ菅谷寺ニ於テ示寂セルコト明白ニシテ字寺境ノ内寺山ト稱

スル山林中ニ在ル古墳之ヲ上人ノ墳墓ナリト云フモノ信ヲ措クニ足	レリ古墳ハ近年墓道ヲ開キ荆棘ヲ裁ケタレ比其以前數百年間前廢中	ニ埋没シ然ニ五輪塔ヲ存セシノニ元末五輪ハ密教ノ傳來ト共ニ本朝	ニ傳ハリタルモノニシテ秘藏記ニ何字是本不生種子也諸種子於地	輪則淨水土縁如葉是故有水輪雖有水縁必待日輪噴氣得具莖葉是故上	有日輪雖有水水土日輪縁必待解脫風得具足長生是故有風輪縱雖有水土	日風皆兼盛實何能生物是故最上有虚空輪所謂五字嚴身也又曰五輪	塔塔具大日如來三摩耶形故雖靈刻小卒塔塔如來法身法界塔塔也トア	ルニ般スヘシ而シテ五輪ハ密教ノ隆盛ト共ニ使用セラレタルモノニ	シテ時代ニ依リテ形式ヲ異セリ而シテ古墳ニ存スル所ノモノ鎌倉時	代ノモノナレハ上人ノ墳墓ト斷案スヘキ最好資料タリ今古墳ニ存在	スル所ノ五輪塔及其煙城ノ廣大ナラサルヲ以テ上人ノ墳墓ニアラス	ト言フコト勿レ頼朝ノ墳墓ノ如キモ廣大ナラザリシナリ最明寺時頼
--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------

意實錄卷六

ノ墳墓ノ如キモ今猶ホ明月院ノ門前斷草離々タル禪院ニ些少ノ墓石
ヲ見ルニ區キス豫倉時代ハ質素ノ時代ナリ宇寺山ノ古墳ノ廣大ナラ
ス五輪塔ノ壯嚴ナラサルモノ時代ノ然ラシムル所ナリ然ルニ今ヲ去
ル六十餘年以前上人ノ供養塔ヲ菅谷寺境内ニ建設セシ時或六部ノ話
ニ上人ノ墓五國峠ニ在リシト云ヘリト傳フレル信スルニ是ラ菅谷
ノ地カ上人ノ家ノ地ト斷定スヘキハ前記ヘタル諸點ノミナラス宇寺
山ノ古墳ハ菅谷寺ノ舊位置ヨリ墓道今猶ホ形跡ヲ存スルヲ以テ見ル
モ寺山ハ菅谷寺ノ旧墳塋ニシテ其上位ニ存スル所ノ古墳之ヲ上人ノ
墳墓ト爲ス誰カ疑ヲ容ルモノアラシク且ツ上人終世猿鶴ヲ伴ヒ顯貴
ニ近カス是レ上人ノ性格ナリ墳墓ノ廣大ナラス五輪塔ノ壯嚴ナラサ
ルモノ亦上人ノ遺志ナルヘシ
上人在歿年度ニ就テモ亦史乘載スレ所ナシト雖上人ト同時代ニ信慈
顯ナルモノアリ天台座主明雲ヲ師トス慈應亦師ヲ回ウスルカ如シト

雖未夕徵證ヲ見ス慈顯ハ麻有志通ノ男ニシテ久安三年ヲ以テ生ル慈
應時ニ年五歳ナリ年齡ニ於テ慈應ハ兄ナリ慈顯ハ弟ナリ而シテ慈顯
ノ弟子ニ親書アリ親書ハ初メ範冥ト称ス父ハ日野有範母ハ源義親ノ
女吉光女ト称ス其父義親ハ爲義ノ父ニシテ吉光女ハ慈應ノ伯母ナレ
ハ親書ト慈應トハ甥姪ノ關係ヲ有ス親書ハ高倉帝ノ祿安三年ヲ以テ
生ル慈應時ニ年三十一後千九年養和元年親書敬岳ニ入テ傳トナルコ
碑ニ據レハ其前年即千治祿四年慈應敬岳ヲ出シト未徵證ヲ見スト雖
慈應當時猶ホ在歿セハ親書何ノ慈顯ヲ師ト爲サン慈應ハ親書ト俗録
アルノミナラス學頭密ノ西宗ヲ究メ徳一世ニ高ク東鑑ニ聖者云カト
称揚シタルモノ鎌倉史官ノ所記ニアラズ本朝高僧傳ハ贊シテ曰應公
之志操高於洞松清似秋月ノ果シテ然ラハ親書固ヨリ慈顯ヲ煩サス慈
應ニ就テ顯密ノ西宗ヲ究メシナルヘシ然ルニ親書慈顯ニ師事シタル
モノハ慈應既ニ去テ敬岳ニ在ラサリシテ以テナルヘシ曰碑傳フル所

善書卷之八

信ヲ措クニ足レリ

源慈應ハ前記ノ如ク爲義ノ季子ニシテ年甫十二歳岳ニ入テ借トナリ
顯密兩宗ヲ究メ年五十八ヲ以テ菅岩山ニ居セラルタル高僧タリシ
ヲ知り得タリト云慈應ハ釋名ニシテ幼名ニ就テハ未タ見ル所無之慈
應ハ源治二年ヲ以テ誕生セラレタル所謂源家ノ若孫ニシテ當時源家
ノ例ニ依レハ其弟乙若應若鶴若等ト同シク何若ト稱セラレタルモノ
ナルヘシト云是レ應測ニ過キス尊皇命脈ニハ乙若ノ上ニ山僧都仙覺
ヲ載セ慈應ノ名ヲ載セス想フニ仙覺ト慈應トハ異名同人ニシテ仙覺
ハ前ノ釋名慈應ハ後ノ釋名タリシカ如シト云未タ徵證ヲ見ス而シテ
慈應ト同名異人アリ百鍊抄卷五ニ

永長元年三月十八日慈應上人勸進賣賤一日内書寫供養一切經トア
リ永長元年ハ源慈應ノ生レタル康治二年ヲ去ル四十八年以前ニシテ
父爲義ノ生レタル年ナレハ同名異人ナルコト明カナリ又貞治二年氏

部卿爲明繪首ヲ奉レ撰セラシル新拾遺和歌集卷十九雜歌中

右近大將道綱の家の人々小弓いて遊むけちときまかりはへらて

贈法印 慈應

梓弓射てしかい無き身に一身れき今日のまよへにはつれぬるかな

返一

道命法印

梓弓射てまよへにたぐきねは友はふれたるあしあそまれトアル
贈法印慈應ハ源慈應ト時代ヲ異ニス即チ贈法印慈應ト交誼淺カラサ
リシ道命法師ハ阿闍梨天王寺別當ニシテ右近大將道綱ノ二子ナリ道
綱ハ攝政兼家ノ子ニシテ一條帝ノ長徳二年右近大將トナリ後チ大生
長保三年右大將ヲ辭シ後一條帝ノ寛仁四年薨去セラレタルモノナレ
ハ此歌ハ源慈應ノ生レタル康治二年ヲ去ルコト一百四十五年以前ノ
歌ナレハ贈法印慈應ハ慈應上人ト同名異人ナルコト明ナルト云
慈應トモ亦同名異人ナリ誤同スヘカラス

願文山考

承久ノ後義頼ヲ北陸ノ一角ニ攀ケタル如地在鎮家義信成ノ家人酒
勾八郎家賢等ノ龍樓セシ願文山トハ果シテ何レノ山カ精忠天日ヲ晉
々美勝ノ千載ニ香シキ家賢等ノ功業ニ長年月ノ開將ニ國人ニ志却セラ
レントシ空青動工ヲ謀リ百萬ノ虎腹ヲ純滅スルニ非サレハ止マサル
ヲ誓ヒシ城址ハ今其所在スハ澤瀉シテ明カナラヌ或ハ越後古城能登
スル所ノ菅谷城ナリト云ヒ或ハ菅谷寺ノ後方ニ峻起セル大峰山ノ支
峰トシ菅谷山ト其所ナリト云ヒ諸説異同アリテ確タルモノナシ嗚呼
回天志士ノ遺蹟コレ豈湮滅ニ委ス可ケンヤ之ヲ考證シ之ヲ論證シテ
其ノ所在ヲ明ラカニスルハ吾人郷民ノ美慕ナリ余淺學ナリト難之レ
カ研究ノ結果願文山ハ忠右府實朝ノ台願所タリシ菅谷寺ノ山脚ニシ
テ家賢寺ノ麓樓セシ山城ハ菅谷寺ノ後方ニ當リ菅谷山ノ巔今猶ホ
城跡ヲ存スルモ山ノ斷崖ニナリト斷定スルニ至レリ

東鑑曰承久三年五月二十九日壬子佐々木兵衛太師信實兵衛重頼相從
法師子
北陸道大將軍聯令上洛受阿波宰相中將信成願家人酒作願勾八郎家賢
之從能引率伴類六十餘人龍千越後國加地在願文之山間信實追討之訖聞
東士敗官軍之最初也

大日本史藤原忠信傳曰初後鳥羽上皇令忠信子養孫人親兼子信成信成
任參議承久之後首預謀議家臣河勾八郎家賢與親孫六十餘人據越後願
文山爲佐々木信實所敗家賢者腰瀧口季子方之後也及上皇崩于隱岐信成
悲悼類髮爲僧

大系圖加地太師信實傳曰承久三五廿二信實子息等引率爲北陸道副將
軍可相具于武部丞朝時此首承越後國所鎮進發之刻二位家信實令兼下
以殿河島泣泣被仰云我故有犬將奉見初汝父盛綱爲使以末極奉公之志
勤感彼往事相制朝時每事可議合由被仰會同廿九日加地在鎮家阿波宰相
相信成卿家人河勾八郎家賢腰瀧口季賢後胤伴類六十餘人引率而籠願

文山信實轉命而後遂合戰而得勝事

東鑑ノ所載極メテ簡單ナレトモ家賢ハ加地在領家參議信成ノ家人ニシテ加地在ニ據テ勤王ヲ謀リ戰機熟スルニ及同在願文之山ニ籠據シタルハ大日本史藤原信實傳及大系圖加地太即信實傳ト併セテ其事實ヲ證スルニ足レリ然レモ當時加地在ニ於ケル願文山トハ果シテ何レノ山ナルカ之レ考證シ論證セサル可ラサル所ナリ請テ先ツ寶塔山ハ所謂願文山ニ非サル所以ヲ説カン

寶塔山ヲ以テ願文山ニ擬シタルハ

越後志野曰願文山金山邑加地中條間河勾八郎家賢指籠

越後志野曰寶塔山城承久記ニ願文山城ト云加地郡金山貝屋村山中ニ在リ云々

北越雜記曰願文山金山村河勾八郎家賢指籠又曰願文山寶塔山トモ云乙金山ハハケ村ノ總跡也往來筋ニテ浦村ト申處親村也云々

中傳ノ又其舊音山ト混同スル説アレト非也

ノ中絶ガキニハ越後志野曰願文山金山トモ云

寶塔山ヲ以テ願文山ニ擬シタルカ余寡聞ニシテ未タ寶塔山ヲ以テ願

文山ナリト斷案スヘキ根本史料ヲ見ヌ大日本史料三浦文書ニ奥山内

中傳金山西鎮云又建武元年トアリテ野塔山ノ所在地タル金山ハ南北

朝時代ニ及ンテ猶ホ奥山庄ニ屬セルヲ證明ス彼ノ家賢等カ加地庄ニ

參言信成ノ家人ナレハナリ家賢等何カ爲ニ自己ニ利益ノ多カルヘキ土地ヲ棄テ、敢テ他領ニ根據ヲ定ムルノ愚ヲ爲サンヤ此一輩ヲ以テ見ルモ寶塔山ヲ以テ願文山ニ擬スルノ否ナルヲ證スルニ足ルニアラ

又々若し走し家賢等加地庄ニ據ッテ勤王ヲ謀リ不幸願文山ニ敗ル、
 ヤ菅谷寺ノ後方ニ聳エル大峰山ヲ越エ其支峰タル寶塔山上終ニ最期
 ヲ遂ケタルモノナリト云ハ、或ハ一理ナキニ非サルカ如シト雖天和
 三年金山ノ領主榊原家右山城ヨリ幕府ニ差出シタル領内古城ニ関ス
 ル書類ヲ索スルニ金山ノ地願文山ヲ認メサルノミナラス同地ニ存ス
 ル古城址ヲ以テ金山組浦村山城金山修理ノ城址トナセリ現ニ金山ニ存
 スル所ノ古城址高館下城及上城ハ共ニ金山氏ノ遺蹟ニシテ寶塔山ハ
 同氏ノ要害トス況ンヤ同山ハ里人寧ラ寶塔山ト稱シ絶テ願文山ト稱
 スハキ理由存セサルニ於テオヤ
 前既ニ寶塔山ハ願文山ニ非サル所以ヲ論證シタルヲ以テ更ニ願文山
 ハ源右府寶朝ノ臺願所タリシ明王護國寺ノ山郭ニシテ明王護國寺ハ
 鎌倉時代ニ於ケル菅谷寺ノ別號タリシ所以ヲ述ヘ而シテ越後古城誌
 載スル所ノ菅谷城即チ當年ノ願文山城タル所以ヲ考證セン

菅谷寺ハ右府ノ臺願所

越後ノ古刹中史上ニ顯著ナルモノ圓分寺ヲ以テ最トシ菅谷寺之ニ次
 ク菅谷寺ハ清和源氏ノ棟梁タリシ源義家ノ曾孫慈應ノ創スル所ニシ
 テ慈應ハ賴朝ノ叔父ナリ賴朝佛法興隆ノ旨メ米邑ヲ菅谷寺ニ寄付セ
 ントス慈應辭シテ受ケス本朝通鑑ニ曰ク
 建久六年冬十月賴朝叔父僧慈應末鎌倉慈應者爲義之廢子也曾爲僧在
 叔岳通顯密西宗今歲於越後菅谷山造一寺住之守鎮佐々木盛綱告之賴
 朝賴朝迎之盡敬不日而告歸賴朝請授之一在慈應辭不受慈應歸勸念文
 後承元四年右府寶朝先志ヲ奉シ米邑ヲ菅谷寺ニ寄セントス東鑑ニ曰
 承元四年二月五日越後國菅谷寺者護念上人董修遺跡也右幕下御時雖
 有興行御志空御事出來之後涉年存託背御本懷歎之由今更及御沙汰彼
 寺邊尋出便宜關所可奉寄之由今日被仰相州云々

然レトモ常時寸毫ノ地モ動カス可ラス更ニ幕曠ヲ以テ菅谷寺ヲ擴大シ臺願所ト爲シ寺跡ヲ改メ明王護國寺ト稱セラル今字寺境ノ田園中臺使參向ノ用ニ供セラレタル御坐ノ間ト稱スル遺蹟モ存在シ當時ノ遺物タル明王護國寺ノ古版毛現ニ菅谷寺ニ存在ス

願文山ハ菅谷寺ノ山跡

願文トハ上古佛事ヲ營ム時ニ施主ノ願意ヲ述ヘタル敬白ノ文ヲ云フ扶桑略記ニ「延長三年八月廿三日勅於勸修寺奉爲母后被修御法事文章博士菅原淳茂造御願文又天曆三年十一月十八日陽成院四十九日御願文ハ本朝文粹ニ載セラレ後願文トハ神佛ニ祈願ノ題目トナレリ鎌倉時代右存實朝菅谷寺ヲ以テ臺願所ト爲シ臺使ヲ參向セシメテ數々護國寺ノ祈願ヲラセラルヤ菅谷寺ヲ擴大シ明王護國寺ト稱セラル願文山ハ其山跡ナリ其末皇曆七百有右府ノ願文ハ湮滅シテ傳ハラス鎌倉時代ノ遺物タル菅谷寺牛王牘ニハ「願文ニ明王護國寺トノミアリテ

山跡ヲ跡ケリト雖古老今猶ホ菅谷寺詣ヲ願文ニ參ルト云ヘリ是レ遺蹟ノ存スル所ニシテ以テ鐵證ト爲スヘシ

菅谷寺ト加地左領家

菅谷ハ古來加地庄ニ屬ス加地庄ハ初メ金剛院領タリシカ後參議信成ノ領スル所トナル信成ハ阿波宰相ト稱ス權大納言忠信ノ子ニシテ右存實朝夫人藤原氏(西條御子)ノ甥ナレハ加地庄領家ト菅谷寺トハ近親ノ關係ヲ有ス且ツ菅谷ノ地ハ北越ノ一寒村ニ過ヤスト奥四圍山一溪貫流頗ル形勝ノ地ナリ志士相會シテ勤王ヲ謀リ據ツテ以テ義旗ヲ舉グルニ適ス此地菅谷寺ノ外祝部成時創スル所ノ日吉神社アリ東鑑ニ「承久三年閏十月二十九日日吉禰直祝部成茂今度依有叛逆與同之疑雖招下關東蒙免許歸洛畢」トナル禰直成茂ト伯叔ノ關係ヲ有セルモノニシテ嘗テ京師ノ風塵ヲ此地ニ避ク成時創スル所ノ日吉社今猶ホ菅谷寺後ニ存ス其東方ニ一團地アリ字京澤ト稱ス京人多ク居宅ヲ構ヒ

タル遺跡ナルハ夕參議信成ノ家人家賢等ノ親故モ亦此地ニアリシカ
承久後家賢等六十餘人菅谷寺邊ニ築據シタルモノ莫ニ故アリトイフ
ヘシ

家賢等ト願文山

右府實朝ノ弒セラル、ヤ公ノ夫人藤原氏ハ内大臣信清ノ女ニシテ其
兄忠信ハ坊門大納言ト稱ス其子信成參議ニ任セラレ阿波守相ト稱ス
類ルオ驚アリ承久三年上皇院宣ヲ下シテ北條氏ヲ討ツヤ信成父子院
ノ謀主トナル信成時ニ加地在領家タリ其家人家賢酒白ハ郎ト稱ス同
類六十餘人ト加地庄ニ據ツテ勤王ヲ謀リ戰機熟スルニ及ヒテ同在願
文山ニ山ニ築據シ遙ニ京軍ニ應セントス五月加地太即信實ノ敗フル
所ニナル

願文山ト菅谷城

菅谷寺ノ後方今猶ホ一城跡ヲ存ス里人古城山ト稱ス天和三年村上城

主神原家ノ書上書ニ山城 藏光組菅谷村 大坊不動別當トアリ又越後古城
誌ニ菅谷城加地郡菅谷村 山城ニシテ不動ノ別當城跡ニ居ル古ハ別當大
坊ナリシナリトアリテ共ニ菅谷寺ニ關係ヲ有スル城跡ト爲セリ果シ
テ然ラハ菅谷寺ハ何ヲ爲ニ城廓ヲ必オトナセシカ又其築城ハ何レノ
時代ニ在ルカ按スルニ菅谷寺ハ信慈應ノ創スル所ニシテ右府實朝ノ
其願所タリ實朝北條氏ノ爲メニ弒セラル、ヤ菅谷寺亦昔日ノ如クナ
ラス後菅谷寺火アリ梵林ノ壯觀一朝ニシテ灰燼トナル菅谷寺縁起ニ
據レハ建長四年三月雷火ニ罹リ一匝後舊觀ニ復スルヲ得サリシカ如ク
傳フレトモ(不動記ニハ元久三年雷火ニ罹ルトナセリ西書一致セス)菅
谷久三年兵火ノ爲メニ炎上セルモノニシテ今猶ホ菅谷寺後ニ存ス
ル古城址ハ菅谷寺カ實朝ノ近親タル加地庄領家參議信成ノ爲メニ設
ケラレタル所ニシテ而シテ信成ノ家人家賢等加地庄ニ據リテ勤王ヲ
謀リ戰機熟スルニ及ヒ寺後ノ要害菅谷城址ニ籠レルモノニシテ所謂

願文山コレナリ不幸戦ヒ一度敗ル、ヤ寺宇兵燹ニ罹レリ菅谷寺縁起
ニ雷火ニ罹ルト云フモノコレナリ故ヲ以テ北條氏ハ菅谷寺ノ復興
許サズ菅谷寺ノ山徒モ亦北條氏ニ怨恨ヲ懷キ後一百十有餘年元弘三
年同族新田義貞義旗ヲ舉ケタルニ當リ驟然起テ新田氏ノ爲メニ觸
トナリ越後及上野ノ國中ヲ徇ヒ義貞ヲシテ機ヲ失セシメスレテ死
ヲ鎌倉ニ仆サシメタルモ亦承久後ニ基因スルヲ知ル而シテ承久帝
佐渡ニ遷幸アラセラル、ヤ權大納言忠信亦越後ニ謫セラレ子孫菅谷
ニ住ス公卿補任ニ曰承久三年藤忠信正二位權大納言六月廿四日關東
武士申請下向七月廿三日自途中歸京二十四日於八條大宮事出家八月
三日武家後越後國無流罪宣告又大日本名蹟回誌、曰菅谷城佐藤忠信
ノ子冠者義志寺泊ニ住ス義忠ノ子忠榮菅谷藩守ト稱ス子孫累世此
地ニ住シ應永年中長尾氏ニ仕フ云々
附記佐藤忠信ハ權大納言忠信ノ誤リナリ承久後菅谷城ニ據レル權

大納言忠信ノ子參議信成ノ家人酒白八郎家賢ハ鎮守府將軍藤原
郷ノ裔ニシテ源義經ノ從臣佐藤忠信モ亦秀郷ノ裔ナリ權大納言忠
信ノ子孫菅谷ニ住ス後世菅谷城ニ據レルモノハ秀郷ノ裔ナリト云
フ點ト世々菅谷ニ居住セル菅谷氏ハ忠信ノ裔ナリトイフ點ト相合
シ遂ニ藤原忠信ト佐藤忠信ト混同シタル者ノ如シ

結論

王朝時代ニ於テ式部大丞景行ノ隱栖以來菅谷ト京師トノ關係甚カラ
ス就中鎌倉時代ニ於テ源義家ノ祖孫僧慈應一寺ヲ創シテ之ニ住シ次
テ日吉社人祝部成時亦来リ住ス後右府實朝慈應創スル所ノ菅谷寺ヲ
台願所ト爲シ源氏ノ氏神石清水八幡宮ヲ八幡宮護國寺ト稱セシ例ニ
準シ明王護國寺ト稱セラル此地始メ金剛院領タリシガ後參議信成ノ
領スル所ト爲ル信成ハ菅谷寺ト近親ノ關係ヲ有セルモノニシテ此時
代ニ於テ京人多ク来リ住シタルモノ、如ク後鳥羽上皇院宣ヲ下シテ

北條氏ヲ討ツヤ信成主トシテ謀議ニ與リ家人家賢等加地庄ニ據リテ
勤王ヲ謀リ戰機熟スルニ及ヒテ菅谷寺後ノ山巔菅谷城址ニ籠ル所謂
願文之山是レナリ當時家賢等新日吉小五月會ニ擬シ流鏑馬ニ託シテ
兵馬訓練ノ地ヲ馬場口ト稱シ防戰第一陣地ヲ遠矢ノ峰及遠矢ノ平ト
稱ス又菅谷寺ノ東方ニ字館中からかたト稱スル地アリかたト稱スル地アリかたト
ハ加地館ノ略ニシテ加地庄領家ノ館トイフ意ナルヘシ其他籠リ山字
馬越ニ鍛冶屋敷ト稱スル地アリ刀劍鍛煉ノ遺蹟ナルヘシ史ヲ索スル
ニ敵將信實北陸道ノ副將軍ト爲ルヤニ位家政子信實ヲ簾下ニ召シ朝
時ヲ相制シ每事談合スヘキ由ヲ仰合メラル蓋シニ位家ノ信實ヲ簾下
ニ召シタルモノハ院ノ謀主タル忠信信成ハ共ニ源家ノ姻族タリ朝時
ヲ相制シテ粗忽ナカラシメンコトヲ注意セラレタルナリ然ルニ信實
命ヲ輕ンジ源家ト關係淺カラサル家賢等ヲ襲ウテ徒ニ合戰ヲ遂ケ勝
ツコトヲ得タルハ信實生涯ノ失策ナリ然レトモ之皮相ノ見ニシテ或

ハ信實陽ニ討チテ陰カニ庇護シタルモノナルヤモ知ル可ラス此段信
實父子功ヲ録セラレスシテ却テ再後北條氏ノ冷遇スル所トナ
ニ曰ク

寶治二年七月廿一日佐々木次郎兵衛門尉實季實季實之子實季法實季寂然捧
歎狀申可浴恩澤之由是祖父五郎兵衛時尉盛綱入道兄弟四人相共右大
將家義兵最初爲御方軍士專一依勵數度勲功雖有連々恩賞亡父太郎信
實之時或就相論或自然被召放之於今者其計略記云々幕府沙汰無シ加
地氏ノ逆境此ノ如シ因ツテ憶フニ北條氏權ヲ移サントスルヤ次第ニ
源家ノ功臣ヲ剷除シ源家ヲシテ孤立セシメ遂ニ之レヲ外セリ加地氏
亦源氏ノ功臣ナリ先是盛綱北條氏ノ爲メニ越後守護職ヲ奪ハル其北
條氏ニ悅ハレザルヤ知ルベシ會參議信成ノ家人家賢等加地庄ニ據ツ
テ勤王ヲ謀ル之レ加地氏所管ノ地ニ於ケル出来事ナリ信實父子不在
ノ故ヲ以テ其責ヲ辭スベカラズ況ンヤ父盛綱ハ信成ノ近親タル菅谷

寺ノ奉行タリシモノ弟故季ハ曾テ信成ノ叔母右府實朝ノ夫人婚嫁ノ
時出迎ヘトシテ上洛シタルモノ而シテ其妹ハ實朝夫人ノ侍セタリ加
地氏ト忠信信成トハ恰モ主従ノ如ク而カモ信成ノ家人家賢等菅谷寺
邊ニ籠據セシニ於テアヤ北條氏ノ眼ヲ以テスレバ信實父子亦疑惑ノ
係ル所タリ是レ此役信實父子功ヲ録セラレズシテ却テ再後北條氏ノ
冷遇スル所トナリシヲ知ルベシ

人アリ或ハ言ハン菅谷ノ地加地城ヲ距ル甚ダ近キニ過ク家賢等籠據
ノ地ニアラズト然レモ寶塔山モ亦距離ニ於テ大差無ク五十歩百歩ノ
議論ノミ取ルニ足ラズ
以上ノ事蹟ニ徴スレバ所謂加地庄願文之山トハ鎌倉時代ニ於ケル菅
谷寺ノ山跡ニシテ越後古城誌載スル所ノ菅谷城即チ當年ノ願文山城
タルヲ知ルニ足ルコレ予ガ多年研究ノ結果斯ク断スル所以ナリ
吉祥庵址

北蒲原郡菅谷寺ノ東方宇馬場田郷倉館ノ内俗ニ尼寺址又吉祥庵址ト
稱スルアリ傳ヒ云フ延喜ノ要菅公ノ第二子從五位下式部大丞
臣父ノ事ニ依リ越後權介ニ貶セラレ來ツテ國府ノ地ニ在リシガ翌延
喜二年九月越後ノ國守紀有世州民ノ爲メニ捕ヘラレ聖代非常ノ事變
ヲ生ゼリ是ニ於テ景行國府ノ地ヲ去ツテ此地ニ隱栖ス後幾何ナラズ
シテ菅公筑紫ニ薨ジ訃音一度到ルヤ景行哀悼ノ情ニ堪ヘズ祠ヲ建テ
テ先考ノ靈ヲ祭レリ菅谷村誌ニ云フ今不動堂ノ傍ヲ俗ニ天神山ト云
フ後十有餘年景行亦因冤ニ接セズレテ卒ス年卅九悲惨ノ極ト云フベ
シ後延長元年天子勅シテ景行ノ官位ヲ復ス茲ニ於テ京師ニ歸葬ス後
夫人(橋氏)尼寺ヲ此地ニ建テ、冥福ヲ祈レリト云フモノ即チ是ナリ
然ルニ常陸國結城郡大生天神社ノ傳フル所ニ據レバ菅公ノ第三子景
行曾テ筑紫ニ到リ公ノ謫居ヲ省ス公曰ク我死ナバ茶毘シテ他郷ニ葬
レト後景行常陸介トナルヤ景勝ノ地ヲトシ筑波山ノ北麓羽鳥ニ一社

ヲ創シ公ノ遺骨ヲ納ム時ニ延長四年二月ナリ羽鳥ノ天神塚ハ其遺跡
ナリト云フ後景行常陸ニ在ルコト六年任滿テテ京ニ歸ルニ當リ大生
ノ地ニ遷セルモノナリト云フニ在リテ景行越後ニ卒セズ延長元年本
官追復ノ後常陸介ニ任セラレタルガ如ク傳フレドモ景行ノ越後ニ謫
セラレタル時既ニ從五位下式部大丞タリシハ御傳記ニ二月二日如筑
紫國長男從五位上行右少輔高視次從五位下式部大丞景行藏人正六位
上兼茂正六位下文章得業生淳茂等悉左遷諸國御録起聞書ニ云配流高
視土佐權守景行越後國兼茂遠江笠原淳茂播磨國トアルニ據リテ明カ
ナレバ其以前ニ於テ正六位下相當官タル常陸介職原抄云常陸介相當
正六位下ト爲レリトハ信シ難キニアラズヤ菅家後集公ノ詩中尚書右
丞薦提印吏部郎中新着緋トアリテ景行初メ正六位下常陸介タリシガ
延喜元年正月七日公從二位ニ昇叙セラルト同時ニ景行亦從五位下
式部大丞職原抄云唐名吏部郎中トナリ新ニ緋袍ヲ着クルニ至リシヲ

推知スルニ足ル想フニ延長元年本官追復ニ依リ景行ノ遺骨ヲ京師ニ
歸葬スルニ當リ越後ニ謫セラレタル以前ノ任地タリシ常陸國ヘモ分
骨シタルモノニアラザルカ常陸國ニハ菅谷氏ト稱シ我郷ニ於ケル菅
氏ト其祖ヲ同ウスルモノ戰國時代マデ存在セシヲ以テ見レバ大生ノ
天神社ニ祀レル菅公ノ遺骨ト稱スルモノ其實我郷ニ卒セラレタル景
行朝臣ノ遺骨ニアラザルカ果シテ然ラバ景行我郷ニ卒シ後景行菅
ノ爲メ尼寺ヲ此地ニ建テタルモノ眞ニ當時ヲ思ブニ足レリ後承久三
年加地庄領家參議中將信成ノ家人酒白八郎家賢加地庄ニ據ツテ勤王
ヲ謀ルニ際シ菅谷寺ハ信成ノ叔母ノ夫タル故將軍左大臣兼朝臣ノ台願
所タリシヲ以テ家賢等同志ヲ菅谷寺邊ニ糾合シ京師ニ於ケル新日吉
小五月倉ニ據シ流鎗馬ニ托シ兵馬倉中ノ爲メ馬場ヲ設クルニ當リ偶
尼寺ヲ他ニ轉セザルヲ得ザルニ至ル跡地ハ後世開墾セラレテ田園ト
ナリ今其基礎ヲ存セズ

天狗山伏

史ヲ讀ム者元弘三年五月新田義貞ノ義旗ヲ擧グルニ當リ越後上野ノ國中ヲ徇ヘ義貞ニ應援シタル所謂天狗山伏ノ意氣雄ナルニ驚嘆セザルモノ莫カルベシ然リト長史家未ダ其何者ナルカラ踴揚セルモノナシ嗚呼當時猶ホ北條氏ノ威勢海内ニ洽ク一天萬衆ノ尊ヲ以テ尚ホ伯耆ニ行在シ給フニ當リ義貞ニ應援シテ機ヲ失セズ元光ヲ鎌倉ニ倒サシメタル無名ノ勤王者之ヲ考索シテ其何者ナルカラ踴揚スルハ吾人國民ノ義務ナリ況ンヤ其勤王者ナルモノ我郷ヨリ出テタルモノナルニ於テヲヤ

頼山陽嘗テ幕府ノ盛時ニ於テ勤王ヲ鼓吹シ日本外史ヲ作ル同書新田氏正記ニ

大館宗氏堀口貞満岩松經家里見義氏江田行義等百五十騎推義貞爲將堅旗千邑生品祠前以擧義旗實元弘三年五月八日也義貞拜請諸軍

進陣于笠懸野比日暮利根河側塵起有兵至可二千騎衆謂敵來矣漸近則越後宗族來援也義貞警喜曰諸君來何速何以知吾擧義大井田經隆伏鞍而對曰今旦羽黑俊賢來徇國中是以馳至在遠境者明日當至俊賢經隆弟善走者也トアルニ據レバ當時義貞ノ爲メニ越後上野ノ國中ヲ徇ヘタルノハ同族羽黑俊賢ナルガ如シト長史レ考索ノ至ラザルモノニシテ太平記ニ去ぬる五日御使として天狗山伏一人越後の國中を一日の間に備丸廻りて通り候ひ一問夜を日に継ぎて馳せ来り候トアルバ當時義貞ノ爲メニ國中ヲ徇行シタルモノハ俊賢ニアラザルコト明カナリ太平記ハ左大臣公定日記ニ去廿七八日之頃小島法師圓寂近日既天下太平記作者也雖爲卑賤之器名匠才也可謂無念トアリテ小島法師ノ作レル所ナリ小島法師ハ南朝ノ忠臣兒島高德ノ後身ニシテ公定ハ公卿補任ニ應永三年丙子左大臣從一位藤公定七月廿四日任左右内大臣依官次可列之由宣下也同五年戊寅左大臣從一位藤公定十二月日辭同六

年己卯前左大臣藤公定六月十五日薨(六十)トアルニ徴スレバ南北朝時
代ノ人ニシテ太平記ハ當時ノ著書ナルコト明カナレバ信憑スルニ足
レリ果シテ然ラバ同書記スル所ノ所謂天狗山伏ナルモノ柳モ何者ナ
ルカ義貞ノ菩提寺タル上野國安養寺ニ觸不動ナルモノアリニ火焰
無不動ト稱ス傳ヘ云フ新田義貞義旗ヲ舉グルニ當リ不動明王義貞ノ
爲メニ一日ノ中ニ上野及越後ノ國中ヲ徇フ事倉卒ニ起リ不動ノ徇行
甚タ急ナルヲ以テ火焰追隨スルコト能ハズ殘リテ菅谷ニ留マル因ツ
テ火焰無不動ト稱シ又觸不動ト稱スト後上野志曰フ觸不動堂ハ安養
寺村ニ在リ和語觸トハ徇フル義ナリ昔新田義貞ノ義兵ヲ發スルヤ事
倉卒ニ起リテ國中及越後ノ一族ニ告グルニ遑アラズ此時天狗山伏國
中及越後ノ一族マテ義貞ノ大塔宮ノ令旨ヲ奉ジテ旗ヲ舉グル由ヲ唯
一日ノ中ニ唱ヘテ告ゲ知ラシム其天狗山伏ハ此不動尊ニテアリシト
所ノ人言傳フ云々大日本史亦太平記ニ據リテ經隆伏鞍對曰前四日有

人徇越後言公奉勅舉兵是以急裝就途ト記セリ是等ノ諸證ニ據レバ當
時義貞ノ爲メニ越後及上野ノ國中ヲ徇ヘタルモノハ共ニ山伏ニシテ
太平記ハ其實ヲ傳ヘタル者也然リ而シテ我郷菅谷寺ハ清和源氏ノ祈
願所ニシテ其開山僧慈應ハ源義家ノ祖孫タリ本朝高僧傳ニ釋慈應字
護念大條判官源爲義系子云々慈應ノ曾祖義家ニ六子アリ第三子ヲ義
國ト云ヒ義國ノ長子ヲ義重ト云フ始メテ上野國新田郡ヲ食ム之ヲ新
田氏ノ祖トス後臨屋里見大館堀口鳥山羽川山名桃井金谷細谷江田大
井田徳川世良田ノ諸族皆新田氏ヨリ出テ上野越後ニ居ル菅谷寺ノ開
山僧慈應モ亦其祖ヲ同クス同族ノ親シニアルモノ事ニ當リテ投合シ
易キハ自然ノ理ニシテ而シテ將軍實朝ノ台願ニ依リ規模ヲ擴大セラ
レタル菅谷寺ガ承久後北條氏ノ嫌疑ヲ受ケ燒討セラレタルモノニア
ラハルカノ疑ヒアリ若シ之レ無シトスルモ菅谷寺ガ北條氏執權時代
ニ於テ堂塔伽藍悉ク燒亡シ再建再興セラレガリシハ事實ニシテ前將

軍賜フ處ノ願文山明三護國寺ノ稱號ハ之ヲ公称スルヲ得ガリシノミ
ナラズ東鑑ニ明ヲカニ越後國管谷寺者護念上人董修遺蹟也トアルニ
又シ本朝高僧傳ハ越後無動寺沙門慈應トアルヲ以テ見レハ將軍實朝
薨去ノ後管谷寺ハ北條氏ニ敵對スル所アリテ管谷寺ノ稱號ヲモ公称
スルヲ得ガリニ至リシモノ、如シ是等ノ事實ニ徴スレバ僧テ盛況ヲ
極メシ管谷寺ノ山徒ハ北條氏ニ怨恨ヲ懷キシハ察スルニ餘アリ想フ
ニ義貞後醍醐天皇ノ詔ヲ奉ジ義旗ヲ舉グルニ方リ蹶然起リテ新田氏
ノ爲メニ觸役トナリ越後及ヒ上野ノ國中ヲ徇ヘタルモノニシテ所謂
天狗山伏即チ是ナリ僧元政ノ山伏詩並存ニ云

山伏者亦僧也、昔我俗稱僧總以山伏是也、今之所謂山伏者、祇是一類異
形之徒也、已、額着小角巾、肩掛不動袈裟、腰橫雙刀、手挂八角棒、而高聲鳴螺
鬪、市邑ト管谷寺ノ山徒亦此ノ形装ヲ以テ東西奔走セシヲ知ルベク
里人今猶ホ管谷寺ノ山徒ヲ山伏ト稱ス回顧スレバ今ヲ去ル六百年前
ノ貫主抑モ誰レナルカ管谷寺過去帳ニ

関山護念上人慈應

- 寛應 建仁二壬戌年三月十日寂
- 俊道 建保元癸酉年七月三日寂
- 貞觀 寛喜二庚寅年五月七日寂
- 寂性 建長六甲寅年十一月廿日寂
- 玄晴 文永九壬申年四月十五日寂
- 宗覺 弘安十丁亥年十二月十日寂
- 信慧 正應五壬辰年十二月三日寂
- 憲淨 正和二癸丑年二月二十日寂
- 藏觀 康永元壬午年四月六日寂

トアリテ藏觀ハ正和二年ヲ以テ憲治ノ後ヲ継キ康永元年ヲ以テ圓寂
 ス藏觀ノ圓寂シタル康永元年ハ元弘三年ノ後十年ニシテ後醍醐天皇
 劍ヲ按ジテ吉野ノ行宮ニ崩御アラセラレタル迄元三年ヲ去ルコト五
 年帝ノ第二皇子宗良親王ノ何ゆゑにゆきみるへくもあらぬ身ノ越路
 の冬を三年へぬらんト仰セラレタル前年ナレバ藏觀ハ元弘三年ニ於
 ケル菅谷寺ノ貫主タリシコト明カニシテ當年ノ勤王僧タルコト亦明
 カナリ嗚呼菅谷寺ノ山徒ハ承久後回天志士家賢等ヲ助ケテ勤王ヲ謀
 ル事遂ニ成ラザリシト最後一百餘年元弘三年義貞義禎ヲ擧グルニ當
 リ其謀ヲ助ケ東西奔走義貞ヲシテ建武中興ノ大業ヲナサシメタル者
 眞ニ偉ナリト謂ッ可ク其功長ニ没ス可ラサル也

美久里神社ノ所在ニ就テ
 マリ菅ノ延喜式内ノ神社
 越後國

沼垂郡五社考ヲ草シ橋將ニ脱セントシテ疑問百出未タ断案ニ難
 キモノアリ美久里神社ハ其一ナリ史ヲ索スルニ沼垂郡ハ紀元一千三
 百六十二年大甯二年以前ニ在テハ越後國ニ郡(岩舟沼垂)ノ一タリシガ
 紀元二千九十六年永享八年以前蒲原郡ニ併合セラレタルモノニシテ
 今郡雖ヲ存セザレドモ延喜時代ニ於ケル沼垂郡ノ境域ハ現今ノ北蒲
 原郡ト中蒲原郡ノ海濱ト東蒲原郡ノ山谷トヲ併セタル地域ナリシハ
 疑ヲ存セズ而シテ美久里神社ノ所在地果シテ何レノ地ナルカ或ハ飯
 豊五王子ノ一タルニ王子神社ニ以テ其所ナリトシ或ハ沼垂白山神社
 ヲ以テ其所ナリレ爲セルモノアリト雖ニ王子神社ヲ以テ其所ナリト
 爲セルモノハ後世ノ著書ナル越後風土記ニ

美久里神社祭神大己貴命神代垂跡在加治郡二王子岳之絶頂ニ久理
 ノ穴窟有之往古大己貴命安息賜穴窟云々前殿有加治云々トナルニ據
 レルモノニシテ和銅時代ニ成レル古風土記ハ逸シテ傳ハラス終ニ續

日本紀ニ其逸文ヲ存スルノミニシテ前記越後原土記ノ如キハ信憑ス
ルニ足ラズ又沼垂ノ白山神社ヲ以テ其所ナリト爲セルモノモ亦美久
里ヲ水分ニ誤解セルニ原由セルモノニシテ現今ノ沼垂ノ地ハ上古江
海ノ地ニシテ神社所在地ニ非ラザルハ明白ナレバ共ニ信憑スルニ足
ラズ之ニ反シ加地山ニ存スル藤戸神社ハ其先加治明神ト稱シ大己貴
命ヲ奉祀シ来レル所ニシテ鎌倉時代佐々木盛綱地ヲ越後ニ賜ハリ美
テ加地庄ノ地頭タルヤ其祖宗多帝ヲ同社ニ祭レルニ及ヒ加治明神ハ
藤戸神社トモ稱スルニ至レルモノニシテ而シテ加治明神ノ所在地
ル宮内ノ地ハ王朝時代ニ於ケル加地郷ノ中心ニシテ加治明神ハ加地
郷中ノ明神大社タリシハ佐々木盛綱ノ長子信實ガ本社前ニ於テ加冠
シ其祖敷實親王ノ御請ノ一字ト其子雅信命ヲ贈實心ノ御名ノ一字ヲ用
キ加地太郎信實ト稱セルヲ以テ推知スルヲ得ベシ信實ハ加冠ハ美久
文治六年七月二十日條ニ

文治六年七月二十日營中有雙六御會佐々木盛綱候御合手子息太郎信
實年十五トアルニ徵スレハ文治六年既ニ首服シテ加地太郎信實ト稱セ
ルモノニシテ文治六年ハ延喜元年ヲ去ルニ百八十九年後ニ當レリ此時
代ニ於テ式内神社タル美久里神社ノ社跡ハ如何ニ變遷セシカ今資料ノ
徵スヘキモノ無ク之ヲ知ルニ由ナシト虽一條帝ノ皇后ニ仕ヘタル清少
納言ノ批草紙ニ

社は布留の社活田の社龍田の社はなぶちの社美久里の社杉の御社し
るゝあら〜ことをか〜任事（任事）の明神いとたのもしトアリテ延喜時代ヲ去
ルコト一百十年前後ニ於テ美久里神社ハ猶ホ著名ノ社跡タリシヲ知ル
ニ足レリ而シテ美久里神社ノ所在地タル沼垂郡ハ和名抄國郡之前ニ
沼垂郡 是沼沼垂賀地トアリテ當時三郷ニ分レ美久里明神ハ其加地
郷ニ屬セル神社ナレハ加地明神トモ稱セシヲ知ルハシ後ニ加地明神ハ
宮内大明神トモ稱セシモノニシテ今ノ藤戸神社是レナリ同社所在地ヲ

菅原實家

儿宮内村古検地帳ニ

明曆四年加治麓光組宮内野帳(校筆)

宮田

上 三十一間 一及八畝四步

同所

上 六間半 一畝十八步

同所

上 七間半 五畝十一歩

同所

上 四間半 八畝二十一歩

同所

上 十五間 八畝七歩

めくりた

上 四十九間 一及九畝十八歩

同所

中 九間 七畝十五歩

同所

中 三十五間 九畝五歩

同所

中 二十一間 一及十五歩

同所

下 二十一間 一及十五歩

同所

上 三十一間 一及六畝三歩

トアリ宮田ハ明神ノ御供田ノ名称ニシテめくりたハめくり田ノ誤記若クハ里俗めり飯ヲみりみえろ見えろヲめえろトモ云ヒみりトめりト混用セル

例少ナカラガレバ「めぐりた」みくり田ト同一語ニ他ナラズ果シテ然ラ
バ「めぐりた」稱スル合及別七反三畝十一歩ノ地ハみくり神社社殿地ノ
遺跡ニシテ當時加地郷ノ明神大社タリシ加地明神ハ延喜式内ノ神社タ
ル美久里神社タリシヲ知ルヲ得ベシ鎌倉時代ノ初メ加地氏其祖宇多天
皇ヲ同社ニ合祀スルニ及ヒ同社ハ藤戸神社トモ稱スルニ至レリト果同
社ハ主トシテ加地明神ト稱シ来レルモノニシテ明曆以後ノ同社祠官ノ
継目状ニ

越後國蒲原郡加治庄宮内大明神之祠官中倉因幡様吉次恒例之神夏参
勤之時可着風折烏帽子狩衣者神道裁許之状如件

寛文三癸卯年六月八日

神祇管領長ト部朝臣兼運

布齋服之夏許容越後國加治庄宮内村藤戸大明神山出村諏訪明神兩社
神主藤原吉國訖向後着同之状如件

安永八年六月廿三日

神祇管領長ト部朝臣兼雄

トアルニ據レバ同社ハ安永八年以後始メテ専ラ藤戸神社ト稱スルニ
レルモノトス之ヲ郷土ノ史實ニ徴スルニ大己貴命ヲ祭神トナセル式内
美久里神社ハ加地明神ノ社跡タリシヲ首肯スルニ足ルモノアリ何ニト
ナレバ美久里ノ言義未ダ定説ヲ聞カズト臣同ジク大己貴命ヲ祭レル神
原郡禮郷式内伊久禮神社ハ萬葉集ニ「伊毛我伊波再伊久禮能母理乃
乃花伊麻許牟春毛都祢加久之見牟」トモアリテ「禮」ト「里」トハ相通ジ「伊」ト「美」
トハ同ジク接頭詞ナレバ美久里ト伊久禮トハ同一意味ヲ有セルモノナ
ルハ言ヲ要セズ而シテ「久里」トハ其言義ヲ詳カニセズト臣祭神ノ事蹟ニ
就キテ案スルニ出雲朝廷ト越後國トハ元來關係シカラズ出雲原土記ニ
大己貴命越ノハツロヲ征セラレタル事蹟ヲ載スハツロハ岩舟即伊弉諾ニ
其遺跡ヲ存スレバ大己貴命ノハツロヲ征シ給フヤ氷川今ノ菅谷川ヲ源

リテ「タイナ」蝦夷語「川ヲ涉リ進ミテ賊地ヲ衝キ給ヒタルコト亦疑フベカ
ラハ菅谷ノ北方ニ聳ユル第三紀層ノ高峰ヲ奇峰イカガヒ又檜形山ト称ス越ノハ
ッロノ根椽地タル関谷郷ヲ展望スルニ尤モ好適地ナレバ大己貴命ノ登
臨セラレタル遺蹟ニアラガルカ同峰ハ大峰トモ称ス大峰トハ上古國見
セラレタル地多ク此称アリ此大峰山麓ノ地タル菅谷ニハ今猶ホ石器時
代ノ遺物ヲ発見スルコト往々之レアルノミナラズ彼等夷族ノ防守シタ
ル「夕テ蝦夷語」遺蹟ヲモ存スルニ徴スレバ大己貴命先ツ加地山ヲ以テ根
椽地トシ進テ夷族ノ巢窟タル「菅谷」ヲ陥レ漸次北方ニ強壓シ遂ニ「ハッロ
ニ及ビタルモノ、如ク而シテ越後平定ノ後出雲朝廷御厨ヲ加地山下ニ
設ケラレタルモノ、如シ然リ而シテ我郷土ノ屬セル沼重郡ノ地ハ奴奈
川姫神社古記ニ「奴奈川姫命沼重田ノ稻ヲ用キ甜酒ヲカモシ津沼田ノ稻
ヲ用キテ飯ヲ爲シ以テ大國主神ニス、メナメシムトアルニ徴スレバ出
雲朝時代ニ於テ既ニ農業地タリシコト明カナレバ大己貴命ノ垂跡地タ

ル加地山祭ニ大己貴命ヲ祭レル出雲大神ノ神領ヲ掌ル御厨ヲ設ケラレ
タルモノナルコトヲ推定スルニ足レリ據テ案スルニ「美久里」ハみくりヤ
ノ約語ニシテ上古御厨ノ地中世御厨庄ナルモノアリ後世御厨村ト称シ
又美久里村ナド称スルモノ諸國其例ニ乏シカラズ美久里神社ハ枕草紙
ノ所謂「ことのみま、の明神」ニシテ美久里ノ地ニ奉祀セル神社タルヲ證ス
ルニ足レリ今猶ホ加地山麓ノ地ヲなかくらくらみつト称ス「くらみくり
ヤ」ノ約ニシテ葦光ハ御厨所在地ノ美名ニ他ナラズ現ニ葦光ニハ大己貴
命ヲ祭レル伊久禮神社ト称スル神社アリ伊久禮ハ美久里ト同一語ニシテ意
味ニ於テ異ナル所無ク全ク同一社跡タリ而シテ伊久禮神社ヲ三ノ宮ト
モ称ス美久里神社ノ三ノ宮ト云フ意ナルベク現今藤戸神社ノ所在地ヲ
古来宮内ト称スルハ「みやけ」又「みくりヤ」ノ遺称ニアラサレバ神社所在
地ノ名称トス以上ノ理由ニ據リテ考フルニ王朝時代ニ於ケル加地郷ノ
中心タリシ加地山祭ニ存スル加地明神即チ藤戸神社ハ「延喜式内美久里

神社ナリト断案スベシ記シテ史家ノ取ヲ乞フ

加地城等蹟

新渡田城東ヲ去ル里餘ニシテ左ノ方松樹鬱蒼タル山ナリ之ヲ加地山
ト爲ク山巔一城跡ヲ存ス加地氏ノ遺蹟タリ明曆四年加治藏光祖宮内ニ
捨地野帳ニ字不戸口ト記シ萬治捨地帳ニモ字キト口ト記シアルモノハ
城ノ冊戸口ナルベシ蓋シ加地氏ハ平氏ヨリ出テタルモノアリ宇多源氏
ヨリ出テタルモノアリ初メ秋田城介来ツテ奥山ニ住シ一庄ヲ立券シテ
奥山庄ト称ス其氏族介シテ加地庄ニ居ルモノ加地ヲ以テ氏トス大日本
史氏族志曰平維茂三世孫永家居越後称奥山氏生資國長成資國称鬼九郎
長成称加地氏トナルモノ是レナリ後十宇多源氏佐々木兵衛尉盛綱邑ヲ
越後ニ賜ハリ来テ此地ニ城キ加地庄ヲ領ス子息信實加地太郎ト称ス尊
卑分脈曰

信實弟加地太郎左兵衛寛元元年七廿六在六十八才法名西仁

信實ノ子孫長ク此地ニ住シ加地氏ト称ス(長子秀忠磯部ニ住シ磯部左衛
門尉ト称ス承久役城守氏冷泉宮ヲ備前兒島ニ遷シ奉ルニ及ヒ秀忠北條
氏ノ命ニ依リ宮ヲ兒島ニ守護ス因テ小島兒島通稱氏ト称ス)信實ノ次子
實秀加地氏ヲ継キ實綱ヲ生ム實綱長綱ヲ生ム長綱加地源太左衛門尉ト
称ス尊卑分脈曰

長綱源太左衛門尉

長綱ノ長子時綱家督ヲ継ギ市子輔房加地庄報恩寺別當トナル佐々木氏
系図曰

時綱加地源太左衛門尉

尊卑分脈曰

輔房加地庄報恩寺別當

時綱ノ長子時秀父祖ノ官寓ヲ襲キ加地源太左衛門ト称シ從五位下備前
守ニ任セラルル時季子弟ヲ奉新田義貞ニ傳シ南朝ニ盡忠又新田氏亡ヒテ

同ウス春綱長尾爲景ノ女ヲ娶ル春綱始メ男子無ク爲景ノ末子景虎ヲ養
子ニ定ム景虎肯ハス景虎ハ霜台公ノ幼名ナリ後ト春綱一子ヲ生ム景綱
ト稱シ家督ヲ継ク越後古城誌曰

春綱始メ男子ナシ因之天文之始國守上杉定實ノ命ニテ長尾爲景ノ末
子景虎ヲ養子ニ被定ト景景虎不肯之後一子出生シテ家ヲ續ク云々春綱
老後樂翁ト號シ天命ヲ全クス定高寺言上書曰

後其名ヲ引替樂翁申候云々ト樂翁ハ香傳寺ノ開基ナリ同寺保存スル
所ノ靈牌云當寺開基樂翁樂翁公大臣士ト春綱天正五年ヲ以テ卒又行年六
十七箇井文書曰

加地遠江守平景英 初名七郎号融方變所 上杉謙信君ヨリ要懇抄景英一人
江御付屬永禄五年北越武者所別當被補天正五年十一月二十二日卒行
年六十七歳

加地氏系圖曰春綱定實守又遠江守以永正八年生初名三郎稱友綱後改景

英仕謙信公預御軍法撰書賜一字稱景英也信州飯山墨文代之一人後被

勘氣天正五年十一月二十二日卒六十七云々

春綱ノ子秀綱父ノ跡ヲ継グ上杉氏ニ仕テ定高寺言上書曰

彦次郎と申もの是は謙信様景勝様口首尾能御奉公相勤申候云々春綱

初名ハ彦次郎ト云フ但馬守ト稱ス又景治ト稱シ對馬守ト稱ス萬休齋ト

號ス天正十五年上杉景勝ノ攻ムル所トナリ八月加地城陥リ春綱戰死ス

北越治乱記曰

天正十五年丁亥八月景勝暇攻加地城而降之今泉城之兵棄城而奔云々

又北越太平記曰

春綱ガ子加治但馬守秀綱ハ謙信代ニ軍功場數有之謙信逝去ノ後景勝

ヲ承三郎景虎ニ與シ討死イタシソレニハ跡絶申候ト秀綱ノ墓ハ加地氏

香華院タル香傳寺ノ西北方ナル字高橋ニ在リ釋尊大心院殿梅庵方休大

居士

付記秀綱ノ墓ハ菅谷村大字藏光寺高橋二千五百四十六番地甲ノ丑ハ其
所ナリ而シテ秀綱ノ死七ニ就キ而説アリ一ハ北越太平記ニ春綱ガ子
加治但馬守秀綱ハ謙信代ニ軍功増敷有之謙信逝去ノ後景勝ヲ奉三郎
景虎ニ興シ討死イタシソレユハ跡絶申候云々トアルニ據レルモノニ
シテ即チ天正十五年加地城落城ノ時ニ討死セシト云フモノ次ハ定高
寺言上書ニ「彦次郎道心致シ万休齋と申し八十七の正月四日相果申候
又筒井文書ニ「加治對馬守景治雖萬休沙弥洞鶴剛弼景英之子父之喪終
テ倍州飯山城介副之事如父被命高梨根津守可申談旨也慶長二年春上
杉景勝會津所替之儀而諫失無承引ニ依テ越後發而幸トアルニ據レル
モノニシテ秀綱ハ天正十五年加地城落城ノ際討死セズ道心ニテ八十
七歳迄生存セリト云フニ在リ何レカ是ナルヲ知ラスト景綱ノ子景
綱右馬助ト稱ス慶長三年上杉氏移封ノ後チ越後ニ在リテ一揆ヲ起シ
堀直寄ノ敗フル所トナル北越太平記ハ關原陣ノ前越後ニテ一揆ヲ起

シ堀直寄守直寄ト合戦ニ被討タル加地右馬助景綱云々トアレハ秀綱
ハ加地城落城ノ際ニ討死シ景綱ハ其際討死セズシテ慶長三年上杉氏
移封セリルニ當リ竹俣越中守ト共ニ越後ニ居残り同五年一揆ヲ起
シ堀直寄ノ討伐スル所トナリシモノ如シ定高寺言上書及筒井文書
ニ據レバ秀綱天正十五年加地城落城ノ際ニ討死セズハ十七歳迄生存
セシカ如シト疑無キ能ハズ想フニ子息景綱慶長三年上杉氏會津ニ
移封ノ際越後ニ居残り同五年竹俣越中守ト一揆ヲ起シ堀直寄守ノ討
伐スル所トナリ後チ香傳寺所在地ニ隱棲シ万休齋ト號シ八十七ヲ以
テ卒シタルモノニアラザル歟越後誌ニ慶長五年加治右馬助資綱行ノ
侯越中守一揆ヲ起シ兵二千餘ニテ本庄ノ城ヲ攻ント押寄ルヲ義明千
餘ノ兵ヲ卒テ逆撃シテ短兵急斬立ラレ軍將加治竹ノ侯士卒ヲ擯シ堀
ノ兼散々敗北ス云々コノ資綱ハ景綱ノ事ナルベク景綱堀氏ノ爲メニ
敗北シ尔後御里ニ潛ミテ老死シタルモノニアラザルカ其年度詳ナラ

スト長慶長五年以後ニ於テ壽ハ十七歳ヲ以テ卒シタルモノナルベシ
 加地氏ハ越後ニ於ケル名門タリ唯ニ越後ニ於ケル名門タリシノミナラ
 ズ天下ノ名門タリシナリ其祖盛綱ハ馬上藤戸ノ海ヲ涉リテ其名天下ニ
 著レ子孫兒島高德ナルモノアリ加地源太左衛門ナルモノアリ元弘建武
 ニ於テ勤王甚々力メ其名亦天下ニ著ル后々戰國時代ニ於テ加地春綱
 ナルモノアリ頼ル武名口リ春綱隠居ノ後子秀綱其跡ヲ継テ上杉氏
 ニ仕テ會、上杉氏ニ継高ノ多アリ秀綱景勝ニ死キ景虎ヲ助ケ景勝ノ爲
 メニ攻ムル所トナリ城陷リ名跡遂ニ絶ス
 加地氏系圖

宇多天皇 — 後醍醐天皇 — 敦實親王 賜源姓 — 雅信 初雅實 時中 —
 後義 領近江國佐々木左衛門 — 經賴 — 成賴 — 章經 — 經方 — 秀定 —

下秀義 佐々木三 盛綱

信實 加地太左衛門

秀忠 磯部太左衛門

實本 加地三郎

實綱 加地源太左衛門

長綱 加地源太左衛門

實茶 二郎

時綱 加地源太左衛門

時秀 備前守 加地源太左衛門

範長 備前守

兒島高德

師秀 越前權守

義秀 源三右衛門

源貞秀 仁壽左門尉

治秀 攝津守 菅原氏

弘秀

定秀

敦秀

雅秀

杜秀

章秀

某 攝津守 菅原氏

秀經

春綱

安藝守 遠江守 以永正八年生 初名三郎 稱友綱 信州 食山 爲之 代之 又從 肥前 氣 永正 五年 十月 二十 日 卒 六十七

元綱

但馬守 信州 飯山 城 介 副 之 守 仁 以 被 命 天正 十 五年 十月 卒 六十七

景綱 在馬助 初名 春綱 即 稱 景綱 治 遠 州 乃 休 辭 伊 之 弟 春 綱 長 官 當 津 國 之 際 不 從 於 後 守

彦三 郎 春 公 子 春 綱 之 弟 被 命 爲 西 國 流 浪 終 於 不 詳 自 京 師

女

明永 春 郎

景明 之 弟 春 綱 於 江 戶 卒

某 山 火

石川城考

石川城址今詳ナラス管谷村ノ中央部ニ属スル一區域ヲ古来石川三ヶ村ト称ス今上石川、下石川、中川ノ三部落ニ分ツ此區域ハ元空閑ノ地タリシガ王朝時代加茂社ノ鰐田スル所トナリ一庄ヲ立券シテ「石河庄」ト称ス東鑑 文治二年三月十二日條ニ

石河庄 加茂社領トアルモノ是レナリト傳フ後キ足利時代河内源氏石川爲元末テ此地ニ住ス爲元ハ備後守ト称シ管領上杉氏四家老ノ一人タリ初メ足利氏越後ニ於ケル南朝ノ勢力鞏固ニシテ容易ニ鎮壓シ難キヲ以テ足利氏ノ七頭タル上杉憲實ノ末子左近将監憲将ヲ越後守トス憲將上

越ニ居ル故ヲ以テ南朝勤王ノ士多クハ下越ニ據レリ石川氏ノ此地ニ封
セラレタルモノ蓋シ下越ノ鎮トセルナリ而シテ石川氏ノ城地今詳ナラ
スト巽宗スルニ下石川宇舞台若クハ其付近ノ地ニアリシモノ、如シ何
ントナレハ上石川ニ於ケル河内神社社名牧園社今神明宮ハ石川氏が故國ノ
神社ヲ勸請シテ城地ノ鎮守ト爲セルモノニアラサルカノ感アリト巽地
勢ヨリ觀察スレハ付近ニ城地アリシトモ見エズ之ニ及レ下石川舞台ノ
地ハ一見城跡ノ觀アルノミナラズ其付近ニ元八幡ト稱スル地アリ神モ
石川氏ハ清和源氏ノ苗裔ナレバ源氏ノ氏神石清水八幡宮ヲ城地ニ勸請
シタルナラン是レ傍證ト爲スニ足レリ而シテ石川氏ノ世祿ハ今詳ナラ
スト巽戰國時代ニ及レ上杉謙信ニ從ヘテ天文二十二年河中島ニ出戦シ
タル備後守房明卒シテ後千家名断絶シ早勝安田因幡守ヲシテ其跡ヲ領
セシムルニ當リ其祿一萬五千石ナリシヲ以テ見レハ石川氏ノ世祿推シ
テ知ルヘシ而シテ石川氏世臣ノ邸地ハ何所ナリシカ是亦詳ナラスト巽

中川ノ地ハ其遺跡ニアラザルカ何ントナレバ石川城ノ廢城トナレル元
和八年ヲ去ル三十有八年后ナル萬治二年ハ上石川下石川既ニ古村ナル
ニ獨リ中川ハ新村タリ想フニ石川城廢城ト共ニ世臣ノ邸地ハ壑田シテ
新村ヲ成セルモノニアラザル歟現ニ中川ノ氏神タル八幡宮今合社神明宮ハ
元八幡ヨリ遷シタルモノナリト云フ是レ傍證ト爲スニ足レリ今石川ノ
地猶ホ遺跡ノ存スルモノ上石川ニ城山ト稱スルモノアリ是レ當時ニ於
ケル要害ニシテ同地宇能野澤ニ數百ノ風霜ヲ經タル五輪塔ニ基アリ里
人之ヲ威嚇ノ膽易ハらわたヲ埋メタル所ナリト云ヘ又田輪旨ヲ蔵メタル所
ナリトモ云フ想フニはらわたハ「はかば」轉訛ニシテ石川爲元等ノ古墳
ナルベシ又下石川藥師堂社名致新社今合社言川龍宮付近ノ山林ニモ五輪塔ヲ藏
見セシコトアリシト云フ是亦石川氏ノ古墳ナルベシ其他花立石佛及阿
彌陀野ト稱スル一團ノ地ハ石川氏ガ教河中島ニ出戦シ陣歿セル士卒ノ
精靈ヲ祀ヒシ遺跡ナルヘシ甲越春秋云

天文二十二年秋八月額信入信濃曰與信玄決雌雄必在此一舉也十六日至河上島部署諸軍村上義清爲先鋒川田軍平及石河房明本莊繁長高梨賴治爲中驅宇佐美定行爲左軍松本大學松木内匠爲右軍謙信自以麾下居中軍柳崎景家與北城長朝毛利廣俊大關朝益爲後軍本莊慶季與中條藤清新谷田長敦大崎高清等二十四人各率一隊爲遊軍武田信玄以昨日入保貝津城遂出河中島與越軍死水而陣相持二日十八日拂曉謙信設伏而出采樵三十餘人甲斐人出逐之伏起盡殺之甲斐先驅三百餘騎疾擊走之追北迫柵吾先鋒義清引輕銳突出甲斐人走入陣門甲斐將真田幸隆保科正直譽中驅出戰義清亂走遊軍將慶季藤清赴援殺百餘人引去幸隆正直跋馬相戰義清與軍平房明繁長合兵而進幸隆力戰被創引退賴治追來搏之三刺未殊幸隆家臣細尾彦助斫賴治背殺之幸隆亦死既而諸隊盡出相戰時日過午至十七合而勝敗未決信玄潛分三百餘騎西南渡河沿麓岸出吾陣後直襲麾下麾下潰走信玄望之躬率健騎數百來薄定行縱左軍橫擊渡邊翔以手兵助勢謙信亦

返麾下甲斐軍三百受敵不能支潰走人馬溺死者甚多信玄與數十騎走謙信單騎疾馳及之揮刀大呼曰吾賢敵相厄信玄聞之大驚躍馬亂河謙信幾追及之叱曰登子盡試我及前擊之信玄麾扇行之有折又擊中其肩從士救之水駛不得近敵將原大隅赴援誤進矛鏃刺謙信不入車急不暇及矛即打其馬首馬驚躍入溝中信玄得聞而追是日西軍死傷各二千餘人トアリテ此役戰死ノ多カリシヲ知ルベシ

付記石川氏斷絶ノ後景勝安田因幡守一萬五千石給ス其子主水惠長ニ年上杉氏ト共ニ關六州ニ移住シ本莊城主村上圓防守ノ領地トナリ其臣官武右近ヲ城代トス其福七千石寄騎士二十人ヲ付セラル元和八年廢城

古代交通考 菅谷驛

本村ハ王朝時代加地郷ニ屬ス而シテ同時代ニ於ケル加地川以北奇日方山脈以南ノ地ハ僅ニ加地菅谷ノ二村ヲ存セシノミ然リ而シテ加地

八本村(經)西南前之位スル大字葦光ヲ中心トシ附近一團ノ地菅谷ハ
大字菅谷ヲ中心トシ附近一團ノ地ニシテ當時縣組ノ地多クハ氷川菅谷
川之系水系ニ沿縁セル一帯ノ地ニ在リ康平寛治ノ越後國邊所載ノ村名
亦此面村ノミニシテ付近無名ノ地ハ此面村ニ隸屬セルナリ同時代ノ地
方制度ヲ見ルニ郡八千戸ヲ過クルヲ得ズ里ハ五十戸ヲ以テ一里トス六
十戸ニ滿ツルモノハ十カヲ割キテ別ニ一里ト爲セリ令義解云凡戸以五
十戸爲里(謂若滿六十戸者割十戸立一里置長一人其不滿十戸隸入大村不
須別置也)每里置長一人嘗檢戸口課殖農桑禁案非違催賦役若山谷阻險
地遠人稀之處(詳縱山谷阻險而人居稠密或人居疎疏而地理平坦者並不在
此限也)隨便量置課若滿十戸者依上法立別里若不滿者令在相保附於大村
也云々ト當時ニ於ケル文通未ク詳ナラスト虽本村ノ屬セル沼垂郡ノ地
ハ多クハ沼澤ノ地ニシテ越前ニ通スル官道ハ高田方山下ノ一孤村タル
菅谷ノ地ヲ驛次ト爲セルナリ史ヲ案スルニ孝德天皇ノ大化二年畿内ノ

諸國ニ驛馬傳馬ヲ置カレシガ後文武天皇ノ大寶令ニハ之ヲ諸國ニ置キ
テ大中小路諸道三十里毎ニ一驛ヲ置ケル所牧令ニ凡諸道須置驛者每三
十里置一驛若地勢阻險及無水草處隨便安置不限里數其乘具及養食等各
准所置馬數備之元來驛傳ノ制ハ國司ノ赴任歸京四度使ノ上京等中央政
廳ト地方政廳トノ往來ニ使シタルモノナレバ此地果シテ驛傳ヲ置カレ
シカ疑ナキニテラスト臣按案使養老三年七月新設ノ如キ檢非違使弘仁中創置ノ
如キ諸國ヲ踐涉シテ國司ノ政賴ヲ檢按シ百姓ノ收態ヲ訪察シタルモノ
ニ在テハ何カナル偏境ト采時ニ通過セザルヲ得ズ特ニ菅谷ノ如キ越前
ニ通スル要路ニ當レル地ナルニ於テヤ今當時ノ驛路ヲ案スルニ本村
ノ中央部方リ菅谷菅谷前ヨリ東ノ方字馬場田ノ一部ニ郷倉館之内ト
稱スル地アリ(菅倉六年反内九年左屋近右衛門總督ニ郷倉館之内云々ト
下ルモノ是レナリ同地ハ上古ニ於ケル驛次ノ館所所在ノ地ニミテ鎌倉
時代如地在領家之ヲ利用シタト遺跡ナシ同所ヨリ南ノ方字日向平ノ一

部ナル住者ニ称スル地ヲ經テわたれば邊境ニ移スル地ニ於テ氷川ヲ渡渉
シ一條ノ徑路ヲ辿リテ加地今ノ加地郡ニシテ古ノ加地ノ地ハ今ノニ至リ邊境ニテ加
地川ヲ涉リテ五十公里驛ニ至リ分テ一ハ蒲原津ニ達シ一ハ小川通ニ
接セリ又北ノ方智藏館之内付近ニ於テ分シテ一ハ馬越山徑ヲ攀テ今ノ
ひかひ山脈智藏館又稱大寺ヲ經テ奥山ノ地往昔中條ノ中心ニシテ平原ヲ奥山ト稱セシモ
三田スルニ氷川通ニ依リタルヘカラス而シテ氷川通ヨリ南下シテ二道スルニ先ツ北道ヨリ馬越山徑ヲ攀テ今ノ
又東ノ山脈内川則チ東ノ山脈ヨリ南下シテ氷川通ニ至ルニ先ツ北道ヨリ馬越山徑ヲ攀テ今ノ
山脈ニ至リ一歩村方面ノ東道ヨリ南下シテ氷川通ニ至ルニ先ツ北道ヨリ馬越山徑ヲ攀テ今ノ
奥山ノ山脈ニ至リ一歩村方面ノ東道ヨリ南下シテ氷川通ニ至ルニ先ツ北道ヨリ馬越山徑ヲ攀テ今ノ
流シ能ク川ヲ涉リ可越ノ交際ニ達スルヲ得タルモノニシテ當時ノ地勢
ヲ以テスレバ管谷ト關谷トハ其間三十里ニ滿タズト雖旣牧令ノ所謂隔
便安置スヘキ意タリシヲ知ルベク固テ以テ本邦ノ中央部タル管谷ノ如
キハ當時ノ古驛タリシヲ想像シ得ハレ予當テ當時ヲ追憶シ一首ヲ得夕
一 脈奇峰千古碧、難聲疑與鹿窠隔、眼前風物感慨多人馬、繞通山下驛

從テ加地郡ハ分レテ加地、奥山ノ面在トナル而シテ加地在ノ園内ハ本村
ノ地籍タル加地山下ノ地ヲ中心トシ南加地川北柳形岳今ノ山脈ニ分在セ
ル狹長ナル一帯ノ平野ヲ統轄シタル左流ニシテ而シテ當時加地在ノ地
勢ハ我々王朝時代ト異ナルト云フ可シ然レドモ柳形山脈ノ溪々タル地勢ハ
シテ靈雲寺湖畔ハ未ダ人馬ノ交通ニ便ナラザルノミナラズ、管内荒川ノ
西川ハ流未決澄ニテ海ニ注キ海濱亦交通不便ナリテ以テ行客ハ依然
氷川ノ淺瀬ヲ辿ラハルヲ得ガリシナリ之ヲ氷川通ト稱ス氷川通ハ徳川
時代ノ中葉ニ至ルニ猶ホ重要ナル驛路タリシナリ寶曆五年氷川ニ架設
セル道念橋墜落シ幕府之ガ復舊工事ヲ施行セラル、ニ當リ地元ニ交付
セラレタル嚮唐六半道念橋御著請目論見帳留ニ
氷川通 打高九十三石ニ斗六竹八合
字道念橋 德後國藩原局
一 工橋長十二間廿七尺五寸 一ヶ所 横山町

是八奥州倉津火澤越後新井市上仁之往運橋二一前々私領之部也
 頭入用を以て普請仰付其後享保十四酉年酒井左衛門尉殿御預り之節
 御入用を以て御普請被仰付其後水野彦四郎内膳十右衛門御代官所之節御
 御林木被下御普請仕末リ寶曆二年竹垣右衛門御代官所之節御石
 木被下御入用御普請被仰付趣榊不果共朽齋去亥十二月二十日之大雪
 二に右土橋崩落候段訴出候二付手代指出見合吟味仕御普請被仰付候
 預り云々トナルノニナラズ是レヨリ先キ寛延二年武藏上野越後出羽
 二於ケル御領地檢地諸役人通過ニ階ニ交付セリトナル御朱印書付写曰
 御朱印御書附阿
 人足二人馬二足從江戸武藏上野越後出羽國道上下並於彼地御用申
 幾度可出之是ハ檢地爲御用市川庄左衛門孫越付而相渡之者也
 寛延二年二月 伯耆
 右宿中

市川庄左衛門岩松直右工門持參之檢地御用書物長持二棹從 江戸武
 藏上野越後出羽國道上下並於彼地御用申幾度可出之是ハ檢地爲御用
 已二月 伯耆
 御證文書二通遣之間可得其意候以上
 已二月 市川庄左衛門
 御證文
 人足二人
 同新
 馬二足
 内一是人足二人代り
 御用長持一棹令持人足
 儀人足 三人

賃輕馬 一疋

外

一賃本馬

下役二人分

二疋

一賃輕馬

限附三人分

三疋

右者按此爲御用市川在左衛門明十三日明六以時越後國蒲原郡中山村
出立同國同郡荒川村並罷越後二任書面之人馬無帶可被指出尤賃人馬
之美八賃義取之無用之人馬之持出開敷候並川々有之所ハ前村分可被
相違候此觸無帶順達於荒川村可被相返候以上

市川在左工門内

巳酉月十二日

中瀬仁左衛門

並本 太七

中山村

菅谷村

加治町

桑野所

荒川村

右之村々在屋

組頭中

當時ノ往還ハ坂井村ヨリ荒澤村ノ陽ナル嚮峠ヲ越ヘ荒澤村ニ入リ水川
水系ニ沿テ溝足村ノ村端柳清水ヲ經テ中山村ニ入リ同村ノ西南端十
ノ橋山村字道念橋ヲ渡リテ下寺内村ノ東端字猿畑ニ入リ同字上野ヲ經
テ下籠新井字籠中ニ入リ同所ヨリ菅谷村ノ東南端ナル字下山出及不動
野ヲ過テ藏丸村方面ニ向ヒ石佛花立阿彌陀野ヲ經テ藏丸村三ノ宮伊又丸
ノ所在ニ於テ右折ニ猿股川ヲ涉リテ加治野三市早道場ニ至レルモノニ

シテ此徑運ハ當時猶ホ氷川通ト稱マリ氷川通ノ名稱ハ王朝時代以來ノ
稱呼ニシテ而シテ王朝時代ハ在テハ加地菅谷ノ西村ノミナリシヲ以テ
菅谷ノ赤菅谷ノミナリシモノ、如シト長徳川時代ニ至テハ中山村ニ元
其人馬ヲ繼立テタルモノ、如シテ菅谷本道ヲ通過シ一節ヲ得タリ

氷川道中

紅葉給々走徑斜晚秋風物也詔筆不知何意傳吟杖七里雪烟斷續家

徳川時代ノ中期ニ及ヒ菅谷湖一度開葎セラル、ヤ地勢忽チ一変シ道
路驛途隨テ改マリ千古ノ驛路タリシ氷川通ハ遂ニ廢道ニ歸セリ再末ニ
百年氷川通ノ名ハ身ク世人ノ忘却スル所トナル

終

附錄

風土述

美久里神社

菅白茅

美久里神社於延喜時代越後國沼垂郡官社五座之一也後世社跡湮
滅不傳就社地所在亦有異說或以爲二王子神社或以爲沼垂白山神
社共是不過無稽說謹按美久里神社以大己貴命爲祭神王朝時代於
加地郷爲大社以故世人稱美久里明神又稱加地明神鎌倉時代佐々
木盛綱賜地越後爲加地庄地頭也其子信實加冠於社前子孫稱加地
氏後加地氏合祀其祖宇多帝於本社再末又稱藤戸神社本社所在地
元大己貴命之垂跡地以故山麓今猶有稱女久里地又有稱伊久禮神
社方言女與美混用而禮與里相通伊與美同爲接頭詞女久里與伊久
禮固同一語於意無異現今北蒲原郡菅谷村所鎮座村社藤戸神社實
於延喜時代爲官社美久里神社

影氣滿天蒼樹間濤聲翠影社頭開明神萬古靈威赫仰見薄高加地山
漁兮太古幾千年古志出雲海路連洞窟猶存加地星明神垂跡至今傳
蒼嶺影松杉蓋四鄰社前一望稻花新出雲朝廷御厨地萬古鄉民祭大神

天神山

在不動堂傍管家遺族祭道莫公處

威靈如在想精誠此地低徊無限情滿眼風光祠宇外一天松籟有餘清

吉祥庵址

管谷寺度方字馬塲田鄉倉楯之內俗稱尼寺趾又吉祥庵景行朝臣

進福處云

每心原田溝洫間郊村二月雨潛々吉祥庵趾春猶淺只見溪邊殘雪斑

憶式部大丞管原景行朝臣

景行管公第二子母田氏生於元慶二年稟性聰明夙就家塾學長爲
文章生進於得業生後叙正位下任常陸介延喜元年正月累進從五

位下式部大丞管公喜之管家後集公詩云尚書右丞薦提印吏部郎
中新着緋時朝廷多說臣管公左遷太宰權帥景行坐父事被貶越後
權介時年二十有四夫人橘氏芳紀二十既生一女而猶有身朝廷不
許夫人隨行二月朔景行出宣風坊遂東越後住國府翌年越後守紀
有世爲州民被擢景行去國府地移管谷明年管公薨於西海景行慟
哭不措建祠祀先考謫居十有餘年延喜十六年卒春秋卅九后有記
復官位歸葬于京師進撰文章博士

一去皇城謫路賒嶺雲洞雨宿何家宣風坊已紅梅落邊境猶寒雪似花
管門厄運多奇禍延喜朝廷半謫臣身在天涯心自若越山風月屬流人
春寒刺骨冷溪風千古管山愜不窮滄落吏郎申孝處崇祠老樹碧雲中
憶管景行夫人

別鶴離鸞淚不乾浮雲西北望悠然朦朧春日人何處斜抱雲和起凭欄
管谷寺

管谷寺在越後國北蕨原郡釋慈應所創寺安置不動明王尊像尊像延
曆二十四年入唐求法僧實澄傳請之奉安於岳皇室尊信延長四年皇
后產難勅修不動法明且皇子平誕後數修不動法久壽元年慈應入叡
岳爲僧厚信仰尊像後慈應護持尊像出叡巡錫諸國文治元年到越後
管谷山造一寺住之安置尊像續行日新慈應護念上人源爲義季子也
通顯密西宗學德兼優守護佐々木盛綱告之賴朝建久六年十月慈應
赴鎌倉賴朝迎之盡敬會將軍賴朝女有疾連年不瘳賴朝憂之慈應加
持之忽瘳慈應不日而告歸賴朝請授之一莊慈應固辭賴朝抑留之慈
應不聽十一月歸山正治二年慈應圓寂承元四年右府實朝奉先志擴
大寺宇爲台願所改寺號賜明王護國寺承久三年加地莊領家參議信
成家人家賢等據加地莊謀勤王信成右府實朝室西八條禪尼姪而與
管谷寺有俗緣信成爲新院謀主也家賢等據管谷寺後之山巔世稱願
文山城願文山明王護國寺之山巔也於是堂宇炎上悉歸灰燼尊像總

免災再表爲北條氏所惡幕府不聽復興不得公稱寺號尊像統安置假
堂漸防雨露山徒深惡北條氏會元弘三年同族新田義貞率義旗也山
徒躡起搜其與金錫冷々如度空東奔西走徇越後上野時人稱天狗山
伏新田氏亡管谷寺復爲足利氏所嫌堂宇廢頽達其極雖然本尊不動
明王天下靈佛光明赫々靈驗日新足利氏季世群雄割據各祈武運當
是時上杉霜台公祈願有靈驗信仰不淺弘治二年納感狀後德川時代
天下茶平貴賤奉禱者多寶曆五年新發田城主源直溫祈武運長久自
創靈龕一基供奉奉安之具後當寺四十四世順應謀伽藍復興勸進
四方明和元年起工同七年落成次慶應四年山門再建設工題曰諸法
山於是稍復舊觀寺宇雖不壯大由末源氏台願所而本尊不動明王者
皇室所尊信實爲鎮護國家道場

青松翠柏傲風霜萬縷香烟滿道場一代高僧練行地法燈千古祭明王
山門無影月如鈎影々林間螢火流家鄉六月不知暑滿袖晚風涼似秋

護念上人

釋慈應，號護念上人，源為義之季子也。幼穎悟，年甫十二，入敬岳為僧。通
顯密兩宗，文治元年，於越後菅谷山，造一寺安置不動明王尊像，住之。練
行日新，守護佐々木盛經，告之願朝，願朝迎之，建久六年冬十月，慈應赴
鎌倉，願朝禮過，盡敬會，願朝女，連年臥疾，慈應加持之，忽癒，願朝喜之，不
日而告歸，願朝請授之一庄，慈應辭不受，願朝折留之，慈應不聽，拜袖上
途，十一月歸山，終世住猿鶴，不再出世矣。正治二年圓寂，年五十八。

刃父屠弟似狼身，隘放相爭賊，懿親獨在菅山伴猿鶴，超然源氏一麒麟。
菅谷城址

越之菅谷有一寺，稱菅谷寺，源為義之季子，信慈應所創，其右府實朝為
台願所改，寺號賜明王護國寺，顯文山者，其山麓也，寺後有一城趾，所謂
顯文山城，承久之後，為加地左領家，矢議信成家人，酒匂八郎家賢等，勤
王之遺蹟矣。大正丙辰晚秋，偶有感。

曾唱勤王雄北陲，巍然大節護皇基，千秋不滅孤忠跡，滿目紅楓似錦旗。

同

勤王遺蹟流斑々，憑吊故墟雲霧綠，開野老未知河內地，管山欲比金剛山。

同

青山隱隱幾春風，憑吊何人與我同，只有香百世，勤王古蹟落花中。

天狗山伏

菅谷寺者，與新田氏同祖，元弘三年，義貞舉義旗也，菅谷寺山徒為
義貞，狗越後上野，太平記所謂天狗山伏是也。

一天如墨暮雲龍，金錫冷々如度空，義氣神通誰測得，緇衣衝雨徇州中。
香臺五月黑雲龍，憶起山僧慈氣雄，記得元弘突西歲，法螺吹作義旗風。

日吉神社

我知菅谷有一社，稱日吉神社，祝部於時所創，於時洛東日吉，譯巨

成仲子也。與僧慈應有親。文治二年。未幾從管谷山。創一社奉仕之。承元四年。慈應所創管谷寺。為台願所。右府實朝尊敬本社。此歲社宇。承久後。加地庄領家參議信成。為院謀主。其家人家賢等謀勸王。築寺從之。山巔據之。以應京軍。戰不利。城遂陷。此役本社為帝家祈敵。伏洛東日吉禰。宜成。成與成時。為骨肉之親。亦為北條氏所疑。被質。東元末。社宇頽廢。不如昔日。雖然神意赫々。遠近崇敬之。星霜七百。今猶古。社鼓音然。天樂聲曾為帝家祈敵。伏神前跪拜。敬心生。

古櫻園

櫻園管谷古稱也。往昔此地櫻樹多。春風駘盪之候。落葩埋谷。今猶存。花水川櫻田等之稱。

崔嵬如削。願文山。山下香甚。白日開。往事茫茫。向誰語。不知那處古櫻園。風光恰似。勿來。巖坡掛櫻雲。白滿山。九十春光看欲盡。行人又踏落花還。

管谷史蹟

管谷寺東方一帶地。承久役加地庄領家參議信成。家人家賢等謀勸王訓練兵馬。俗稱馬場田。

楫水渡東加地庄。在中刺在古僧房。寺邊每每原田。處知是當年兵馬場。

友人某謂予曰。我鄉似大和十津川。未知其當否。嘗想我鄉不啻以

櫻花有名。往時回天志士。據以畫王事。櫻花與史蹟。酷似吉野。鄉有

一溪水。稱花水川。繞屋流。一夜聽淙淙聲。偶憶延元帝。吉水院御製

賦得一絕。

一川花水碧。搖溶埋谷櫻花。萬重緬想芳山吉水詠。中宵洗耳響淙々。

加地城址

佐々木盛綱始築加地城。為州守護職。其子信實稱加地氏。子孫世為豪族。建武中。天下分為南北。越後越前。越中陸奥。大和河內等諸國。屬南朝。當是時。加地氏擁新田氏。攻足利氏。轉戰不利。關門終戰。及距今六百有餘歲。過其山麓者。誰不俯仰感歎乎。慨有作。

283
30

老樹森々烟霧間林鴉飛處暮雲還南朝舊草君知否萬古巍然加地山

秋日過加地山麓偶憶宗良親王舊事

宗良親王之精忠偉蹟文献足徵者往往在焉獨於越後之事未詳按諸書興國元年親王年二十有九逃去越後當時義貞及義頭既歿義宗等圖恢復奔走武藏上野越後之間當是時親王賴加地以親王有詠

馬はたれとかちの、道の小さ、原しのひ子かよふほとけ露け

々今四年移信濃

親王韻事至今傳回首茫茫六百年秋草荒涼加地里北風千古恨綿々

大正十三年一月二十六日印刷
今年二月十一日發行

非賣品

著者發行者兼印刷者

菅

與

吉

越後國北蒲原郡菅谷町大字菅谷
大十七番戸

終

